

やったり踊り

春日部は日光道中の宿場町として古くから開け、近郷の各村では日光道中の伝馬助郷を負担する夫役を課せられた。

夫役は土地の面積に比例して課せられるもので、各村では不毛の土地を所有することを拒んだ。

このような不毛地は隣接する村に押しつけて、自村の夫役を少しでも軽くしようと互いに争った。

その頃、大畑村と備後村の境にも不毛の地があり、両村はこの土地を互いに押しつけ合い結着がつかなかった。ある時両村の村役人が話し合い、相撲によってその土地の帰属を決しようということになり相撲大会が開かれ、大畑村に軍配があがった。この時大畑村の人びとは大よろこびの余り「ヤツタリヤツタリ」とはやし囃子たてて踊り回ったという。それ以後吉例としてこの遺風を残したのが「やったり踊り」のはじまりであると伝えられている。

「やったり」の名称は踊りの囃子言葉（「ヤツタリナーヤツタリナーヤツタリヤツタリヤツタリナー」）にちなんでつけられたといわれている。この踊りは昭和30年県の無形民俗文化財に指定されている。

この行事は毎年7月15日、武里駅西口の香取神社で行われる。

当日夜10時過ぎから真夜中にかけて大畑の若衆が揃いの浴衣に赤の鉢巻、白足袋に赤緒の草履をはき街道筋に集まり冷酒で前祝を済ませて行列を整え神社に練り込む行列は若衆頭を先頭に大幣を捧げる先導者（直垂ひたたれに烏帽子姿えぼし）、笛方、大太鼓、踊り手と続き約50名位が、笛、太鼓の道中囃子によって「トリレーロ」という奇妙な踊り振りで境内へ練り込む。

境内の中央に10m程の大万灯を立てて、社殿を一巡して万灯の根方に大太鼓を据え円陣をつくる。練り込みが終ると先導者が進み出て「神々の大伊勢なればやったり踊りおめでたやおめでたや」と唱える。この間踊り手は蹲踞そんぎよしたまま右肩をぬいて長襦袢の袖を出し、左裾を端折り扇子を開いて右手に持って待つ。唱え言葉がすむといよいよ踊りがはじまる。

踊りには「扇子踊り」・「手踊り」の二種があり、単調ではあるが、陰影の深い念仏調独特の哀韻を込めた歌にのって、動作の大きい苦行とも思える屈伸の激しい律動的、男性的な踊りである。

扇子踊りの後、手踊りが続き各各3度ずつ踊る。

歌詞の一部をつぎに紹介します。

「扇子踊り」

一、南無阿弥陀仏ソンリヤイ南無阿弥陀仏ソンリヤイ仏命陀仏

二、弥陀様浄土ソンリヤイ南無阿弥陀仏ソンリヤイ仏命陀仏

「手踊り」

一、五尺イヨーオーホホオーホホイこんこの五尺てん手のごーいサンサ仲をそん染めたよ

二、誰イヨーオーホホオーホホイこんこの誰にくん呉りよとてサンサ仲をそん染めたよ（以下略）

各種の終りに「ヤツタリナーヤツタリナーヤツタリナーヤツタリヤツタリヤツタリナー」の囃子言葉が入る。

初出「広報かすかべ 昭和五十六年七月」かすかべの歴史余話